

宮型の「宮」は殯に際して造られる殯宮（もがりのみや・ひんきゅう）の名残といわれています。殯とは一定期間遺体を安置して鎮魂する古来の儀式を意味し、宮の内部は死者の魂がこの世から離れるための空間でした。殯の場所では遊部達（あそび）が鎮魂のため日本的食物を供し歌舞を修めましたが、これが日本の供養のはじまりといわれています。靈柩車に飾られた宮型は、まさにこの殯宮が再現されたものなのです。つまり、古来からの日本的な葬送のかたちが宮型の靈柩車として残されてきたのです。死者は葬

なつたのかもしれません。文化の発展や人間性の変化にともない靈魂觀念・他界觀念・呪術意識は変化し、結果として葬法も変わります。スマートに、目立たず、そして安価に。火葬場周辺に住まいを構えた住民が宮型靈柩車に出会いたくないという理由から、宮型靈柩車の公営火葬場への乗り入れを条例で禁止する自治体まであるそうです。

しかし、いくら死を遠ざけ、忌み嫌うような社会になつても、死そのものから逃れることは誰にも出来ません。通りで出会う靈柩車の中には誰かの大切な家族が乗つているのです。宮型は無くなつても、かけがえのない人生を締めくくられた方の旅立ちに出会つたら、静かにお見送りする心は持ち続けたいものです。



「現代社会と仏教」

列の靈柩車の宮内に收められ、火葬までの
しばしの間、鎮魂の時間を過ごし、この世に
別れを告げるべし。

六月十六日、浅草公会堂において「第47回一隅を照らす運動東京大会」が開催された。

第一部では、ご来場の皆様とともに勤めを行つた後、例年の声明雅楽に舞楽を加えた法会が厳修された。また、日頃「一隅を照らす運動」を実践されている檀信徒代表者の表彰が行われた。



一隅大会報告

告

皆様からの善意の募金は、総額七十六万六千九百八円になりました。これを天台宗地球救援事務局に寄託します。ここに謹んで御礼を申上げます。

同像は天平五(733)年の同寺開創時(当時は興福寺と同じ法相宗)に本尊として迎えられたとみられる。また、奈良県新薬師寺の香薬師や法隆寺の夢違觀音との細部にわたる造形上の共通点や、近年の科学分析で同時代の他の金銅仏と成分比率が合致することなどから、奈良周辺の同一工房で制作された可能性が極めて高く、飛鳥時代後期の、いわゆる白鳳期(645~710)の仏像を代表する傑

作と評されてきた。なお、天台宗内で国宝仏像を所蔵しているのは、中尊寺（高石手）、妙法院、三千院、宝善院（京都）、道成寺（和歌山）と深大寺だけであるところからも、世界文化の見地から特に価値の高いものだけに指定される「国宝」の重みが知られるのである。

また、同像は「倚像」といいう台座に腰かける姿をしてゐるが、これは白鳳期に特に流行したもので、そのルーツは、何と中国隋代（581—

は、「柔和忍辱」(常にやわらかく、困難なことにも耐え忍ぶ)の実践を旨とする天台法華の教えそのものを、その姿かたちのなかに見事なまでに表現しているとさえ思えるのである。

これほどまでの仏像が約一三〇〇年ものあいだ、東国のかの武藏野の地で守られ続けてきた奇跡に、今更ながら感動する



618)の仏像に求められるという。白鳳期の仏像と平安時代に開宗した天台宗とのつながりは、見出しにくいかもしれない。しかし、まさに隋代とは高祖天台大

現在深大寺では国宝仏拝
觀の列が平日でも絶えず、
仏教美術の権威を迎えての
記念講演会なども来春まで
予定されている。

釈迦如來像拜觀時間

9時から17時（夏季）
16時（冬季）



東京教区より
宗務総長選出